

## 室町時代物語『仏鬼軍』について——新出本の紹介を兼ねて——

本井牧子

仏菩薩と地獄の冥官たちの合戦を描く『仏鬼軍』<sup>(一)</sup>は、いわゆる擬軍記物に分類される室町時代物語である。本稿は『仏鬼軍』諸本の現状から、本作品享受の様相を確認し、あわせて従来知られていた諸本に共通する欠落部分を有する新出本を紹介して、作品の全体像把握に供するものである。

### 一 『仏鬼軍』の享受

『仏鬼軍』に関する先行研究は決して多いとは言えず<sup>(二)</sup>、諸本を整理したものは管見に入っていないので、煩雑ではあるが諸本の状況を確認することから始めた。多くの室町時代物語が多様な異文・異本を持ち、複雑な諸本の様相を呈しているのに対し、この『仏鬼軍』は異本と呼ばれるような本をもたない。それは一つの本

が忠実に書承されていったという事情によるものである。まずこの点を確認しておきたい。

### (一) 『仏鬼軍』諸本

現在知られている諸本を『国書総目録』によつて示すと次のようになる（以下へゝ内の略称を用いる）。

へ写本<sup>(三)</sup>

- ・十念寺蔵絵巻、一軸、〔重文〕へ十念寺本
- ・神宮文庫蔵模写絵巻、一軸、享保十四年（一七二九）写へ神宮文庫本
- ・宮内庁書陵部蔵、『片玉集』卷五十所収、享和元年（一八〇一）写へ片玉集本
- ・京都大学文学部美学美術史学研究室蔵模写絵巻、一軸へ京大美学本
- ・東京国立博物館蔵模写絵巻、一軸へ東博本

・森川勘一郎氏蔵、伝仏鬼軍絵巻断簡、一幅、〔重美〕

〈森川本〉

〈刊本〉<sup>④</sup>

・元禄十年（一六九七）版本〈元禄版〉

・文政六年（一八二三）版本〈文政版〉

・天保五年（一八三四）版本〈天保版〉

・刊年不明版本

写本のうち東博本、森川本は未見のため、今回の考察からは除外するが、それ以外の諸本は皆、写本の筆頭に挙げた十念寺本を直接、あるいは間接に写したものであることが確認できる。以下それぞれの本について概略を示しておく。

まず現存諸本の共通祖本となっているのが、十念寺本である。十念寺は京都市上京区にある浄土宗の寺院であり、ここに『仏鬼軍』と題される一軸の絵巻が所蔵されている。これは四図三段から成る紙本淡彩の絵巻である。奥書などは一切持たないが、十六世紀頃の制作と考えられているものである<sup>⑤</sup>。

神宮文庫本は、

此巻物者紫野一休和尚自畫讀本紙十念寺有り。

享保十四年（一七二九）西四月中旬写之。

という書写奥書を持つ紙本淡彩の絵巻である。しかし挿図の図柄や構成などは後掲の元禄版によっていることが

明らかであり、十念寺本を直接書写したのではなく、元禄版を写し、それに彩色を施したものと考えられる。

津村涼庵（一七三六〜一八〇六）によって編まれた叢書である『片玉集』巻五十には、「佛鬼軍一巻」として本作品が収められている。この片玉集本は、

右京今出川十念寺宝物、寛政十二（一八〇〇）庚申秋八月四日拜<sup>二</sup>閱之<sup>一</sup>艸写し置。……

という本奥書と、

右谷中幡随院乘運自省主書写之本、浅草行安寺圃阿上人借<sup>三</sup>得之<sup>一</sup>、朽鈍借<sup>三</sup>傳之<sup>一</sup>書寫了。

享和改元（一八〇一）仲夏

涼庵

という書写奥書を持つ。本奥書の直後には、

巻物一尺一寸、丈七間、茶地金襴表紙、竹帙添、内  
篋梨子地、上袂、殊珍紐付

表題佛鬼軍之三字ハ然光院官道見親王御筆

と、十念寺本の形態などに関する注記がある。これを十念寺本と比べてみると、十念寺本の表紙は「茶地金襴表紙」である。また「佛鬼軍」という表書きを持つ「梨子地」の内箱に入っており、それが巾着のような布袋に入られ、さらにやや大きめの外箱に入れられている。「殊珍紐」というのはあるいは布袋の紐のことを指すのかもしれない。いずれにしろこの記述は十念寺本の形態によく一致するので、片玉集本が元にした本の書写者は、実

際に十念寺本を見ていたことが確認できるのである。本文や、「画 初地獄の有様を図す」といつた挿図に関する注記は十念寺本とほぼ一致する。片玉集本は乗運という人物が十念寺本を直接写した本を、圓阿上人を介して津村涂庵が借り受け、書写した本ということになる。

京大美学本は紙本淡彩の絵巻である。書写奥書などは一切持たないが、挿図・詞書共に十念寺本を忠実に模写した本であることが一見してみてとれる。

次に刊本であるが、最古版である元禄版には十念寺十八世沢了による跋文が付されている。

……雒陽十念寺の、寶物とかや、其かみ名におふ、紫野の一休和尚へ大徳寺一休和尚ハ俗姓ハ仁王百一代ノ帝後小松院第二王子也の、自画自贊の、佛鬼軍、世にもてはやすことなく、閑窓にうつもれて、世々を経るに、見るものなし。こゝに、十八世の何がし、巻をひらくに、經文まなこにさへぎり、表示、掌にあり、禅心をうつして見るに、其詞たへなる事、心詞にいたりては、いふにさらなり、靈奇と云つべし。今、梓に、ちりばめむとて、正本をもつて、一字一画のたがひなく、淨はりの鏡にうつし、俱生神の筆にまかさず、後世のたからと、なさむために、かたじけなく、ありがたき事をも、おそろしきをも、拙き心にて、梓にちりばめ、ふつしかに、しるし侍

ることを、……、

十念寺十八世 沢了書之

元禄十<sub>一</sub>曆上春吉日 洛陽書肆 栗山宇兵衛開版  
これによれば、沢了が、長い問世に知られることなく眠っていた仏鬼軍絵巻を見つけ、後世の宝とするべく、それを忠実に模して刊行したということになる。実際に十念寺本と比べてみると、元禄版が十念寺本を忠実に写したものであることが確認できる。本文については、一行の文字数が十念寺本よりも少なくなっており、濁点・振り仮名が新たに加えられている点を除けば、文章はもちろんのこと、字体や傍書にいたるまで十念寺本に一致する。また挿図は十念寺本の図柄を、見開き、あるいは半丁の中に収まるように組み立て直したものと考えられる。ただし、十念寺本とは異なる位置に挿入されているものもあり、またいくつか十念寺本に全く見られない図像を含むということも付け加えておく。

文政版は元禄版の復刻版である。識語に、

京師十念寺所藏佛鬼合戰狀、傳稱書畫并一休和尚真跡也。惜哉今展轉不知<sub>レ</sub>落<sub>レ</sub>誰手<sub>一</sub>。書肆英遵、幸得<sub>二</sub>古家秘藏模本<sub>一</sub>。筆法有度因仏刻之庶乎。不<sub>レ</sub>失<sub>二</sub>其真<sub>一</sub>矣。

文政六年（一八二三）癸未八月 筠庭節信識  
とあり、十念寺本の模本によつてということが記されている

るが、匡郭の違いを除いて本文や挿図は元禄版にほぼ一致するので、この「一古家秘蔵模本」というのは元禄版のことを指すと考えてよいであろう。

天保版は、「元禄十<sup>丁</sup>年刻／天保五<sup>年</sup>再板／洛陽書肆 寺町三条下ル町 書屋宗八／六角通寺町西へ行町 小川多左衛門」という刊記をもつ。ただし文政版のように元禄版の忠実な復刻版というわけではなく、新たに序文を付し、挿絵についても菱川清春の手になるものを載せるなど<sup>(六)</sup>、元禄版を再構成している様子がかがわれる。とはいえ、十念寺本の系統に位置づけられるものであることに変わりはない。

以上確認しえた現存諸本は全て十念寺本を直接、間接に写したものであり、異文と呼べるほどの異同は見られないものばかりである。

## (二) 十念寺と一休和尚

黒川眞一氏が指摘されるように<sup>(七)</sup>、近世の地誌類をみると、十念寺の項でこの『仏鬼軍』について触れるものが少なくない。例えば『都名所図会拾遺』巻一には、十念寺 ……『佛鬼軍圖』一休和尚の筆なり。佛地獄を破つて無比の樂城とし給ふ圖なり。當寺什寶とす。<sup>(八)</sup>

とある。このように『佛鬼軍』は十念寺の什物として広く知られていたため、十念寺什物ということを冠して受容されていたのである。現存諸本が全て十念寺本を忠実に写しているのも、十念寺の『佛鬼軍』というものが知名度を持っていたからである。

さらに、この十念寺本は十念寺の什物であることと同時に、一休和尚の作であることも知られていた。先に引用した『都名所図会拾遺』には「一休和尚の筆なり」とあり、近世の刊本では物語だけでなく、挿絵もまた一休の手になるとされている。元禄版の跋文には「名におふ紫野の一休和尚の自画自贊の佛鬼軍」とあり、文政版の識語にも「京師十念寺所蔵佛鬼合戰狀、傳稱書畫并一休和尚真跡也」とあった。また天保版には「一休和尚仏鬼軍」という外題をもつものまである<sup>(九)</sup>。十念寺什物の『佛鬼軍』が、次々に、しかも非常に忠実に書写、刊行されたのは、それが一休の作であると信じられていたことも理由の一つとして考えられよう。

ここで注目したいのが片玉集本末尾の記述である。本文の後に次のような文章が続く。

一休像<sup>ハ</sup>椅子<sup>ニ</sup>座、左足垂<sup>ト</sup>、右足<sup>ヲ</sup>膝<sup>ニ</sup>置。但、左手<sup>ニテ</sup>右足<sup>ヲ</sup>押、右手<sup>ニテ</sup>扇<sup>ヲ</sup>持<sup>ツ</sup>

喝下分主寶、句裏轉<sup>ニ</sup>機輪<sup>一</sup>、竹篋<sup>ハ</sup>飯<sup>ヲ</sup>掌握、佛魔俱不<sup>レ</sup>親、吹毛三尺、撥動煙塵、慣戦作家、七事随<sup>レ</sup>身、

八方受<sup>レ</sup>敵、坐<sup>三</sup>断要津<sup>一</sup>、呵<sup>レ</sup>佛罵<sup>レ</sup>祖、奪<sup>レ</sup>境奪<sup>レ</sup>人、  
 淫坊酒肆獨朗天、眞宗門作<sup>レ</sup>異、須還<sup>三</sup>宗純誓<sup>一</sup>、臨  
 濟正法今墜<sup>レ</sup>地、但願祖教再回春、<sup>三</sup>図<sup>二</sup>佛鬼軍一期書<sup>一</sup>  
 之、以塞<sup>三</sup>其尾<sup>一</sup>

享徳三年（一四五四）六月 一休子宗純

この記述は前章で引用した本奥書の前に位置するので、  
 このような讚を付された一休像が、絵巻の末尾に描かれ  
 ていたか、もしくは絵巻と一具のものとして所蔵され  
 いたのではないかと考えていたところ、幸運にも十念寺  
 ご住職野諦賢氏のご厚意により、この記述と一致する  
 一休像が現在も十念寺に所蔵されていることを確認す  
 ることができた。この一休像は紙本淡彩の掛幅であり、「一  
 休禅師画像 十念寺」という表書きの箱に収められてい  
 る（以下「十念寺蔵一休像」と称する）。一休はまさに  
 「椅子<sup>ニ</sup>座、左足垂<sup>レ</sup>、右足<sup>ヲ</sup>膝に置。但、左手<sup>ニ</sup>右足<sup>ヲ</sup>押」  
 えた姿に描かれているが、右手に持つのは扇ではなく竹  
 篋のようである。さらに画面の左側には、曲縁に立てか  
 けられた長い太刀が描かれている。

さてこの讚に「<sup>三</sup>図<sup>二</sup>佛鬼軍一期書<sup>一</sup>之、以塞<sup>三</sup>其尾<sup>一</sup>」と  
 あることをみると、一見、一休が『仏鬼軍』の絵を描い  
 たかのように受けとれる。しかし、この讚は別の一休像  
 に付された讚を改変したものと考えられる。

『大和文華研究』四一「一休特輯」<sup>(一〇)</sup>は、一休宗純

の画像として多くの図版を載せるが、その中にこの一休  
 像とほぼ一致するものが四点ある。代表的な真珠庵蔵の  
 ものをみてみると、<sup>三</sup>図柄も、画面上方に付された一休の  
 自讚も、ほぼ十念寺蔵一休像と一致する。異なるのは

「<sup>三</sup>図<sup>二</sup>佛鬼軍一期書<sup>一</sup>之、以塞<sup>三</sup>其尾<sup>一</sup>」という部分が、「<sup>三</sup>蓑  
 笠紹徳山主<sup>二</sup>図<sup>一</sup>余陋質<sup>三</sup>需<sup>二</sup>贊書<sup>一</sup>以塞<sup>三</sup>其請<sup>一</sup>」となつてお  
 り、末尾に「享徳二歳季夏日狂雲子宗純」としてある点  
 である。つまり、真珠庵蔵一休像に付された讚は、享徳  
 二年（一四五三）に「蓑笠紹徳山主」の求めに依じて一  
 休が自ら付したものである。

さて、この真珠庵蔵に代表される一休像は朱太刀像と  
 呼ばれる種類のもので、曲縁に長尺の朱太刀を立てかけ  
 ている点の特徴である。これは『東海一休和尚年譜』の  
 次のような逸話に基づいて描かれたものであることが指  
 摘されている<sup>(一一)</sup>。

永享七年（一四三五）乙卯

師年四十二歳、曾在<sup>三</sup>泉南<sup>一</sup>、毎<sup>レ</sup>出<sup>三</sup>遊街市<sup>一</sup>、持<sup>三</sup>一  
 木劍<sup>二</sup>彈鉄<sup>一</sup>、市人争問<sup>レ</sup>師、劍<sup>以</sup>殺<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>功、師持<sup>三</sup>此  
 劍<sup>一</sup>、是甚<sup>レ</sup>麼用、答曰、汝等未<sup>レ</sup>知、今諸方履<sup>レ</sup>知識、  
 似<sup>三</sup>此木劍<sup>一</sup>、收在<sup>レ</sup>室則殆<sup>レ</sup>似<sup>三</sup>眞劍<sup>一</sup>、拔出<sup>レ</sup>室則只木  
 片耳、殺猶不<sup>レ</sup>能、況活<sup>レ</sup>人乎、人皆咲<sup>レ</sup>之、瑞子繪<sup>三</sup>  
 師像<sup>一</sup>、曲録<sup>三</sup>牀角<sup>二</sup>靠<sup>一</sup>長劍<sup>一</sup>、以代<sup>三</sup>烏藤<sup>一</sup>、讚有<sup>三</sup>吹毛  
 三尺、発動<sup>三</sup>煙塵<sup>一</sup>之句<sup>一</sup>、<sup>(一二)</sup>

一休が木剣を持ち歩いているのを不思議に思った人々が訳をたずねると、今の「贖知識」たちはこの木剣のようなものであり、室内にあるときには真剣のようにみえるが、いったん外に出るとただの木片にすぎない、これでは人を殺すことはおろか、人を活かすこともできないと答えたという逸話である。「贖知識」というのは禅僧のことを指したもので、「壮年気鋭の一休の禅林社会への反逆的な宗風を物語るもの<sup>(三三)</sup>」と解されている逸話である。「吹毛三尺、発動煙塵之句」はこの逸話に基づいて描かれた朱太刀像に付された讚であるとされている。

さて、この讚の内容は非常に難解で解釈に窮する語も少なくないが、この朱太刀の逸話や、「臨濟正法今墜<sup>レ</sup>地、但願祖教再回春」となどとあるところから考えても、臨濟宗の現状を批判しているということだけは間違いないであろう。

ここでこのような讚が『仏鬼軍』執筆に関わらせて書かれることの妥当性について考えてみたい。注目したいのは『仏鬼軍』の結びにあたる部分の記述である。真言陀羅尼の功德について述べた文の後に、

おそろしき地獄をも極楽になすぞかし、法身をかへずして仏にならん事、やすかるべし。智者此ことはりをさとれば、よろづの事つみならず。無智の人は学生にとふべし。世中には智者に過たるたからはな

し。世間の浅名をもて法性のふかき所をあらわす。此合戦状は仏智にかなへり。更にそしる事なかれ。という文が続く。ここにみられる「智者」や「学生」と重んじる態度は、讚にみられた辛辣な現状批判の態度とはむしろ相反するものと考えられる。この讚は『仏鬼軍』に付されたものではなく、作爲的に朱太刀像の讚を改変して『仏鬼軍』に付したものと考える方が穩当であるように思う。

ではなぜこのように讚を改変した一休像が描かれたのであろうか。ここで再び片玉集本の記述に目を向けてみたい。一休像に関する記述の後、本奥書、十念寺本の形態に関する注記が続き、一休和尚の略歴が記された後、

右十念寺開山眞阿上人

後龜山院之孫胤<sup>三三</sup>一休和尚ト學友なりし故、常ノ法語ノ趣ヲ一休画贊ニ認被<sup>レ</sup>贈也。

という記述がみられる。眞阿は浄土宗の僧侶であり、十念寺の開山として知られる人物である<sup>(三四)</sup>。その眞阿が一休と「學友」であつた縁で、一休画贊の『仏鬼軍』が贈られたとするのである。この記述は本奥書よりも後に位置することから、書写者の覚え書きのようなものと考ええる方がよいかもれない。しかしここには十念寺と『仏鬼軍』、そして一休を結びつけようとする姿勢がはっきりとうかがわれる。

真阿は永享十二年（一四四〇）に六十六歳で寂しているので、十念寺蔵一休像にみられる享徳三年（一四五四）に『仏鬼軍』が贈られたとするならば、明らかに矛盾することになる。また一休（一三九四—一四八一）と真阿の生存時期は確かに重なるが、真阿の方がかなり年長であり、二人が学友であったという記事も管見に入っていない。一休と真阿のつながりは、一休作説に信憑性をもたせるための後人の作為である可能性が濃厚であろう。

このように考えると、十念寺蔵一休像もまた、こうした流れの中に位置づけられるのではないであろうか。君野氏は、この一休像が紙質から近世後期の制作と考えられるものであることから、『仏鬼軍』一休作説に信憑性を持たせるために制作されたものであろうと推測しておられたが、おそらく氏のご推察の通りであろう。十念寺蔵一休像は『仏鬼軍』一休作説を裏付けるものとして、既存の一休像の讚を一部改変し制作され、絵巻と共に閲覧書写を願う人々に供されたものと考えられるのである。さらに想像をたくましくしてみれば、おそらくはその場で一休と真阿上人に関わらせて絵巻の由来が語られることがあったのであろう。

少なくとも片玉集本の本奥書にある寛政十二年（一八〇〇）時点では、所蔵者である十念寺の周辺で一休作説を前面に押し出そうという動きがあったと思われる。こ

ういった動きがいつ頃まで遡れるのかということについては、全く未詳としか言いようがないが、最も古い版本である元禄十年版にすでに一休作説が載せられているので、その頃まで遡る可能性も考えられよう<sup>二五〇</sup>。このような所蔵者の側からの積極的な動きもあつて、『仏鬼軍』は十念寺蔵一休作という名の下に広く知られることになった。現存諸本が全て十念寺蔵一休作ということ冠して書承・刊行され、異本を生じることがなかったというのも、十念寺本の知名度によるところが大きい。『仏鬼軍』諸本の現存状況はこのような事情によるものだったのである。

## 二 新出本の紹介

しかしながら、このように忠実に書承されていった十念寺本は完本ではない。そのため、前章で挙げた諸本は全て、十念寺本の欠落部分を踏襲することになったのである。本章では、その欠落部分を補うと考えられる新出本を紹介し、『仏鬼軍』の全容を概観する。

### （一）十念寺本の概要

まず、欠落状況を明らかにするために、十念寺本につ

いて概観しておきたい。十念寺本現存部分の構成を示すと以下のようになっている。

第一図 地獄の図

第一段 「西方」阿弥陀を大将とする極楽の軍勢

第二図 阿弥陀勢の出陣の図

第二段 「東方」薬師を大将とする軍勢

第三図 薬師勢の出陣の図

第三段 ① 「北方」釈迦を大将とする軍勢

② 「南方」宝生を大将とする軍勢

③ 四方から攻め寄せた仏菩薩と獄卒の戦い

④ 大日の加勢の派遣、閻魔王宮炎上

⑤ 浄土と化す地獄

⑥ 結び

⑦ 回向文

第四図 ①「釈迦勢の出陣の図

②「蓮華を生じる地獄の釜

③「不動明王らの加勢

④「逃げまどう獄卒と浄土と化す地獄

十念寺本は四図と三段の詞書によって構成されているが、一見してわかるように第一図は対応する詞書を欠いている。続く第一段からは、仏側が戦いの準備を整えて地獄に攻め寄せる場面が続くわけであるから、物語の冒頭としては唐突である。そのため、例えば『日本古典文

学大辞典』の「仏鬼軍」の項のように、「巻首の欠部は冥官などが仏法結縁者まで大抵地獄へ落したという、戦の起りがあった」のではないかと推定されてきたのである。

しかし、とにかくここでは十念寺本現存部分の梗概を示しておくことにする。第一段は極楽に武装した諸菩薩が集結する場面から始まる。西方極楽の阿弥陀をはじめ、東方の薬師、北方の釈迦、南方の宝生という仏たちが、四方から地獄に攻め寄せる。激しい戦いが繰り広げられるが、七日七夜たっても勝負がつかない。それを聞いた大日が大勢の加勢を遣わし、とうとう閻魔王宮は炎上する。地獄は大日を中心とする浄土と化し、四方を阿弥陀らの四仏が領することになった。地獄と浄土とは結局同じもので、それを覚るか覚らないかの差なのであるとして、この物語が仏智にかなったものであることをことわり、回向文によって物語は結ばれる。

(二) 新出の京大印哲本

さて、『室町時代物語大成』の『仏鬼軍』の解説では、十念寺本に欠けている前半部分をもつ本として『弘文莊敬愛書図録』<sup>(二七)</sup>に掲載された本の存在を指摘している。『弘文莊敬愛書図録』の解説は以下のようなものである。



仏鬼軍絵（徳川中期頃写、淡彩）

通行本は一巻、これは二巻で、通行本に欠けて居る上巻を持つ珍しい「仏鬼軍」絵巻。……中字平仮名の巻首に「此二幅十念寺之什物、而一休作之、土佐光信画之」の墨書がある。上巻の本文は「むかし恋し床しとなげきかなしみし七世四恩たつねとりて、極楽の友たよりに仕らんとそ、はやりける」ではじめて居るから、恐らく巻首若干を欠いて居るのであるが、対照すべき写本も版本も現存して居ない。……書写年代は寛政文化頃であろうか。文字は平俗な書風でとるべき所はない。絵もスケッチ風の略画だが、描写はかなり達者で、よく要領をつかんで居て、要所に紅・黄・淡青の彩りを加えてある。下巻末、本文のあとには、

願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道  
法泉禪窟什物（印）

としてあるから、禪宗寺院の旧蔵にかかっているのである。別に正方形の大型朱印が押捺してあるが、印文は読み得ない。

この新出の二巻は、一見十念寺本の上巻がいまだ散逸せず、下巻の巻首も欠けぬ以前に、模写したものの如くだが、あれの現存分とこの巻の絵とを対照

すると、構図も描き様もどうも別らしく、同一のものとは信じにくい。或は別巻の模写であろうか。

……下巻に一ヶ所錯簡があるが、本文は無欠。この解説にもあるように、これまでこの「弘文莊敬愛書図録」掲載本（以下弘文莊本と略称）以外に、前半部をもつ本は知られていなかった。

ところが昨年、京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会「お伽草子——物語の玉手箱——」に際して京都大学蔵御伽草子が悉皆調査される機会があり<sup>二六</sup>、その中でこの弘文莊本と同様の本文をもつであろうと推測される本が見出された。文学部印度哲学研究室蔵本（以下京大印哲本と略称）がそれである。

この京大印哲本は『国書総目録』や松本隆信氏の「増訂室町時代物語類現存本簡目録」<sup>二九</sup>などにも採録されていない、全く未紹介の本である<sup>三〇</sup>。京都大学附属図書館の書名カードには「廃棄」の記き入れがあるので、このことなどもその存在が知られなかった原因であろうか。

京大印哲本の書誌は以下のとおりである。

一冊 写本 袋仮綴 素紙共表紙 本文楮紙

二四・六×一七・二釐 外題「仏鬼軍<sup>聖正</sup>」 無境界

每半丁九行 本文漢字交じり片仮名文 一部振仮名

付 三二

外題下の「邪正記」という記述は他の本にはみられないものである。

京大印哲本と『弘文莊敬愛書図録』に掲載される冒頭の写真とを比べてみると、本文は全く一致する。ただし、弘文莊本が平仮名交じりであるのに対して京大印哲本文は片仮名交じりである。

注目されるのは奥書に、

○右ハ卷物ニ二軸ニ贊ト畫ト雜ト書ス。十念寺之什物ニシテ而一休作リニ之贊ニ土佐光信作ニ之畫ニ也。其ノ寫軸在リニ法泉ニ。享保十四（一七二九）己酉歲三月借テ而寫ニ之贊ニ也。

とあることである。まずこの絵巻がもともと十念寺の什物であること、それは一休の著であり、絵は土佐光信の手になるものであることが書かれている。これは弘文莊

本の巻首に「此二幅十念寺之什物、而一休作之、土佐光信画之」とあるのと一致する。またその十念寺本を写したものが「法泉」にあり、それをさらに写したとの記述があるので、弘文莊本に「法泉禪窟什物」とあったことと考えあわせると、直接かどうかはひとまず置くとしても、京大印哲本は弘文莊本の写しということになる。弘文莊本に挿図があるのに対して、京大印哲本は文字のみの写本であるが、挿図の内容を記す簡単な注記があるので、京大印哲本が写した元の本には挿図があったと考え

てよいであろう。そこでは京大印哲本の構成を、解説から推定される弘文莊本、十念寺本と対照して示す。京大印哲本の図の欄に、挿図に関する注記を引用する。また、第五図の後に置かれた和歌も引用しておく。

		京大印哲本		弘文莊本		十念寺本	
第一段	阿弥陀と文殊の評定 大日の指示	第一段	なし	第一段	なし		
第一図	「此間ニ阿彌陀并諸菩薩等ノ畫アリ」	第一図	なし				
第二段	閻魔と阿防羅利とのやりとり 地獄側の戦いの準備の様子	第二段	なし				
第二図	「此間ニ炎魔王宮并地獄ノ畫アリ」	第二図	第一図				
第三段	★						

		〔西方〕阿弥陀を大将とする極楽の軍勢	第三段	第一段
		「此ノ間ニ佛菩薩出陣ノ所ノ畫アリ」	第三段	第二段
		〔東方〕薬師を大将とする軍勢	第四段	第二段
		「此間ニ薬師如来 <sup>十二</sup> 神将等ノ出陣ノ畫アリ」	第四段	第三段
		①〔北方〕釈迦を大将とする軍勢	第五段	第三段①
		②〔南方〕宝生を大将とする軍勢		第三段②
		③四方から攻め寄せた仏菩薩と獄卒の戦い		第三段③
		「此間ニ釋迦ヲ大将トシテ諸菩薩ト地獄ト合戦ノ畫アリ」	第五段	第四段
		「三千ノマタラ女ヲ引キ連レテ人ハ淨土ニマイルゾト知レ」	？	なし
		「法華經ノ妙ノ一字ノカニテ人モ佛モ淨土ニゾ棲ム」		
	第六段	△大日の加勢、闍魔王宮炎上▽ △淨土と化す地獄▽ △結び前半▽	第六段	第三段④ 第三段⑤ 第三段⑥前半
		結び後半		第三段⑥後半
		回向文		第三段⑦
		注記の書き漏らし？	第六段	なし

京大印哲本は六段五図という構成になっている。弘文  
 荘本は上巻が二段二図、下巻が四段四図とあるから、京  
 大印哲本の方が一図少ないことになる。内容から考  
 えると、弘文荘本は京大印哲本の第二図のあとで巻が分  
 かれており（点線部）、末尾に第六段に対応する図があ  
 ったと考えるのが最も自然であろう。京大印哲本は第六

図に関する注記を書き漏らしたのではなからうか。  
 京大印哲本を見ると、元の本の錯簡をそのまま写した  
 と思われる箇所がある。△で囲んで網掛けにしてある  
 のがその部分であるが、これが京大印哲本では★印の部  
 分に混入している。（表はその錯簡を正した形で示して  
 ある。）この混入は丁の途中で起こっているため、丁の

錯簡によるものではなく、京大印哲本が元の本にあった錯簡をそのまま写したものと考えられる。京大印哲本はその錯簡に気付いていたのか、錯簡部分の前後に〇印をつけている。弘文荘本の巻分けが先ほど推測したとおりであるなら、錯簡は下巻の内部のこととなるから、これもまた弘文荘本の「下巻に一ヶ所錯簡がある」という点に一致する。こうしてみると、京大印哲本は弘文荘本を写した本と考えるとよいと思われる。

そこで今度は十念寺本と京大印哲本第二図以下を比べてみたい。本文は若干の誤写・誤脱を除いて一致し、構成もほぼ一致する。挿図に関しても、京大印哲本の注記と現十念寺本の挿図の内容とは一致するといつてよい。ただ、京大印哲本の第五図の後に二首の和歌が書かれている点と、十念寺本第三段が京大印哲本では絵を挟んで二段に分かれている点が異なっている。京大印哲本が写した弘文荘本は現十念寺本第三段を二つに分割していると思われるのである。第六段は大日の加勢を得て仏側が勝利をおさめ、地獄を浄土とするという物語のクライマックスが描かれる。おそらくはその後に浄土と化した地獄を描く第六図があったと思われる。

ここで、十念寺本の欠落部分に相当する京大印哲本の第一、二段の内容を紹介する。以下『仏鬼軍』本文の引用は、十念寺本の現存部分については十念寺本により、

欠落部分については京大印哲本によることとする。

#### 【第一段】

まず第一段の冒頭は、

昔シ戀シ床シト歎キ悲ミシ七世四恩タツネトリテ、  
極楽ノ友タヨリニ仕ラントゾハヤリケル。

という文で始まっているが、弘文荘本の解説にもあるとおり、巻首若干を欠いているのか、このままでは文意をなさないように思える。続く部分からの梗概を示す。

極楽の阿弥陀大將軍が文殊菩薩に極楽を地獄に移す先例の有無を尋ねる。これに対して文殊は様々な經典などからその根拠となる文を示し、極楽と地獄とは同じものであるということを主張する。阿弥陀は、強敵閻魔王に対抗するために、上臚大日の力を借りるべく使者を遣わす。大日は西方阿弥陀、東方薬師、南方宝生、北方釈迦と、それぞれ四方の將軍を任じ、さらに両界諸尊なども力を合わせて戦うべしとの勅定を下す。

#### 【第二段】

これを聞いた閻魔王は怒りをなし、阿防羅刹を召して、近頃自業自得の憲法に背いて信心厚い者を間違つて地獄に墮したりするようなことはないかと尋ねる。阿防羅刹は念仏者もまた地獄に墮としていると述べ、それは念仏さえしていればどんな罪も赦

されるところに罪業を作り放題の衆生の方に非があるのだとして、地獄側の正当性を主張する。戦いに備えて冥官たちは着々と準備を進め、仏側の勢を今や遅しと待ち受けるのであった。

京大印哲本第一段の後は第一図に関する注記があり、「阿彌陀<sup>#</sup>諸菩薩等ノ畫」が描かれていたとあるが、挿図の内容は推測するしかない。しかし第二段を絵画化したと思われる第二図は、十念寺本の第一図に相当すると思われる。実際に京大印哲本第二段の詞書きと十念寺本の第一図を比べると、密接な対応がみられる。また、京大印哲本の「此間ニ炎魔王宮<sup>#</sup>地獄ノ畫アリ」との注記も、十念寺本第一図の内容と一致する。十念寺本第一図は京大印哲本第二段と同様の、またはきわめて近い本文に基づいて描かれたと考えられる。京大印哲本の出現によって『仏鬼軍』の全容がほぼ明らかになったといつてよいであろう。

しかし未解決の問題も残っている。そのひとつは弘文荘本と十念寺本の図柄や構成の違いをどう説明するかという点であろう。弘文荘本の解説にもあるとおり、弘文荘本は「十念寺之什物」としながらも十念寺本とは異なった図柄となっているのである。図版には二図しか載せられていないので、それ以外の図に関しては不明としか言いようがないが、少なくともその二図を見る限り、

十念寺本よりも精緻な描写となっており、構図などもかなり異なる。例えば宝生については十念寺本ではそれに相当するとみられる図が無いのに対して、弘文荘本では如意宝珠を上空から獄卒たちに投げつける姿が確認できる。また前述のように十念寺本の第三段が二段に分けられていると推測される。解説の指摘のように弘文荘本が写した本は十念寺本とは別の本である可能性も考えられるのである。京大印哲本には図が無いので、この点に関しては全く未解決のままである。弘文荘本が再び世に現れることを願うものである。

### 三 『仏鬼軍』の密教色

ともあれ、京大印哲本により、『仏鬼軍』の全体像を把握することが可能になった。本章では、作品全体を見渡した時に浮かび上がってくる特徴の一つとして、『仏鬼軍』の密教色について触れておきたい。この点については既に秋谷治氏にご指摘があったが<sup>三三</sup>、京大印哲本によって判明した前半部から、この点がより明確になった。仏側の総指揮をとるのは大日だったのである。

まず阿彌陀と文殊との間で「炎魔王ヲ追ヲトシテ極樂ヲ地獄ニ移サン事」についての問答が交わされた後、阿彌陀は、

我宗（王カ）ニテ法身如來大日心王ト云上臘マシマス。昔ハ地獄モ極樂モ皆大日心經（王カ）ノ敷地ナリ。カヤウノ大事ヲ申上ズハ其恐アリ。

と考えて、大日に子細を申し入れる。

大日心經（王カ）ノ仰ニ云ク、「炎魔王宮并ニ八大地獄ハ我が屋鋪<sup>ヲ</sup>字ノ一門ナリ。雖然阿防羅刹ト云非常ノフテ物、本體ヲ忘レテ是ヲ知行ス。但シ極樂ノ若者共ハ往生人迎ヘントテ管弦ハカリハ上手ナリ。弓矢取リトハ聞ヘズ。中<sup>ノ</sup>蜂ノ巢ニ手カクナ<sup>レ</sup>トゾ示シタマヘル。「我ハカライニ隨フベシ。極樂ノ勢バカリニテハ叶ベカラス。西方ヲバ阿彌陀大將トシテヨスベシ。東國ニハ究竟ノ武者ヲハカル國ナリ。其ヲ郎等ニ具シテ藥師佛大將トシテ東<sup>ノ</sup>手ヲヨスベシ。南方ヲバ寶生佛ニ仰セ付テ、北方ヲバ釋迦佛大將トシテ受取タマウ。若ヨワカラン所ヲバ、眞言宗ノ金剛・胎藏兩界諸尊、不動・降三世ヲ大將トシテ、敵ヲ中ニ取<sup>リ</sup>籠テ、興アル戦一イクサ有ベシ」トゾ敕定ハ下リケル。

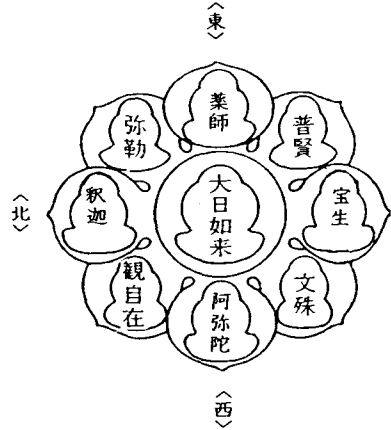
阿彌陀からの使いに対して、大日は西方に阿彌陀、東方に藥師、南方に寶生、北方に釈迦をそれぞれ大將として任じ、明王を大將とする眞言宗の兩界諸尊を加勢に遣わすとの勅定を下すのである。この勅定は物語の結末にお

いて意味をなすことになる。地獄勢が敗退した後で、地獄を浄土に変える部分を引用する。

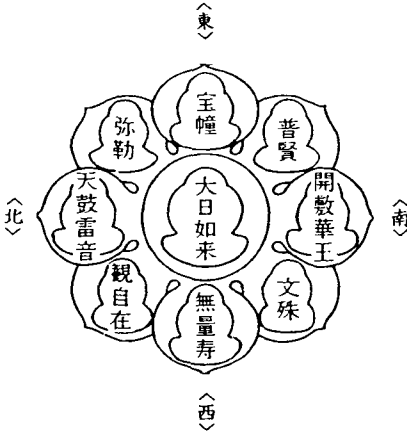
阿防羅刹をばこしらへすかしてこゝろをあらためて  
仏になし給へり。冥官冥衆のすがたをかへずして、  
曼荼羅の聖衆に引上せて、等流法身と、地獄に浄土  
をうつして、地に<sup>ヲ</sup>字をしきて、かたちを八葉蓮  
華に作たり。中台には大日心王の都を立たり。東方  
をば藥師領し給へり。南方おほ寶生領し給。西方を  
阿彌陀申請給。北方おほ尺迦主つき給。四角をば普  
賢・文殊・觀音・弥勒知行し給へり。是も則一往の  
会尺也。「諸尊皆同大毘盧遮那仏身」と尺して大日  
心王の都也。然らば多百由旬のほのおは仏の万徳と  
なりにけり。劍の山とおもふは妙覺山也。鐵の湯と  
おもふは功德水なりけり。是をば五智の都とぞなづ  
けたる。

この大日を中心とする「五智の都」は「八葉蓮華」の形をとり、大日を中心として四方に四仏を配し、さらに四角に四菩薩を配している。これは形態的には胎藏界曼荼羅の中台八葉院にならったものと考えられる。これを図示すると次のようになる。

【『仏鬼軍』五智の都】〈南〉



【胎蔵界曼荼羅中台八葉院】二三三



「五智の都」の「五智」とは大日如来の五種類の知慧のことである。金剛界曼荼羅ではこれを五仏に配する<sup>(二四)</sup>。この『仏鬼軍』においても五仏がそれぞれ五智にちなんだ武器を持っている。

方位	金剛界	胎蔵界	『仏鬼軍』	
中央	五智	五仏	五仏	武器
東	法界体性智	大日	大日	
南	平等性智	阿閼	業師	大円鏡智の盾
西	妙觀察智	宝生	宝生	平等性智の箱
北	成所作智	阿弥陀	阿弥陀	妙觀察智の幡
		不空成就	釈迦	成所作智の盾

もちろん『仏鬼軍』に描かれる五仏は両界曼荼羅の五仏と完全に一致するわけではない。また形態的には胎蔵界曼荼羅によりながら、五智を配す点などは金剛界曼荼羅によっているなどの不統一もある。『仏鬼軍』作者もそのことは承知の上だったのであろう、「是も則一往の会尺也」とことわることを忘れていない。『仏鬼軍』の五仏は曼荼羅の五仏になぞらえつつも、密教系の仏を業師、釈迦といった馴染み深い仏に換え、大将として活躍させているのである。南方の宝生だけはほかの四仏に比べると知名度が低いと思われるが、その名前や如意宝珠

をもつという点から、さしたる郎等眷属をもたないが、宝珠という宝を武器とすることによって「始にはおこがましく見へ、後には一番の大勢にぞ成たりける」という活躍の場を与えられたのであろう。

いずれにせよ、『仏鬼軍』においては両界曼荼羅がモチーフとなっており、仏側の中心に大日をおくということが一つの大きな特徴となっているのである。

#### 四 結 び

京都十念寺の什物、一休和尚自画自賛として広く流布した『仏鬼軍』は、残念ながら現在前半部を欠いているため、物語の全容は世に知られていなかった。それが京大印哲本の出現により、阿弥陀が自ら地獄を浄土とすることを目論んで戦いを仕掛け、大日が勅定を下して戦いの総指揮をとることで、仏と鬼との軍の幕開けとなったことが明らかになった。さらに若干の欠落の可能性も考えられるとはいえ、物語としては筋が通ったこととなる。

仏菩薩側の総指揮をとるのが大日であり、両界曼荼羅が作品全体の構成上重要な役割を果たしていることから、『仏鬼軍』の密教色の強さが再確認された。十念寺本には『法華経』や『成唯識論』からの引用がみられ、

京大印哲本により新たに判明した前半部には「天台宗」、「華嚴宗」、「真言宗」の説や「大日経ノ疏」などが引用されたりしているので、必ずしも密教一色というわけではないが、密教的な要素は全編にわたって濃厚であるように感じられる。

出典を記さずに仏典を引用している部分については、まだ出典を明らかにしえないものも多いが、注意したいのは現時点までに禅宗の語録のようなものからの引用は確認していないということである。例えば『狂雲集』については、当然ながら『臨濟録』などに典拠をもつ詩句が繰り返し用いられていることが指摘されている<sup>(二五)</sup>。

こういった点からも、以前から疑問視されてきた一休作説はますます疑われることとなろう。『仏鬼軍』は一休に仮託されたものと考えるのが穏当であろう。

同様に、片玉集本にみられた、真阿を『仏鬼軍』成立に関与させる説についても、さらにその信憑性を疑わせるような記述が見られる。京大印哲本第二段に、閻魔王に向かつて獄卒が、

近來ハ一念彌陀佛ノ輩ノ地獄ニハヲチレリ。其故ハ、南閻浮提ニアシキヘンニ入テ南無阿彌陀佛ト唱フレバ、イカナル罪業ヲカシタル者モ罪ニナラストテ、ワザト愚癡ナル男女尼法師、コノ如ク罪ヲ作ル。法門正教ヲ破シ、餘ノ佛事善根ヲ申留ムル事、以外ノ



罪業深重ノ事ナリ。

と、「一念彌陀佛ノ輩」に対する批判とも受け取れるような発言をする場面があるのである。兩界曼荼羅による構成の下では、阿彌陀は大日の下位に位置づけられることも考えあわせると、本作品が浄土宗の寺院の周辺で制作されたとは考えにくいのではないだろうか。

しかし現実には『仏鬼軍』は、所蔵者である十念寺側からの働きかけもあつて、一休作十念寺蔵という名の下に、次々に、しかも忠実に書写されていったのである。このように広範に享受されたからこそ、当の十念寺本に欠けている部分を有する京大印哲本の出現にもつながったのであろう。『仏鬼軍』は自らの知名度によって、再びその全容を世に顕わしたのである。

〈注〉

引用に際しては、私に句読点・返り点・濁点等を補った箇所がある。割注はへん、引用者注は（ ）で括弧で示した。

(一) 本書の書名は通常「ブッキグン」と音読されるが、近世の版本には「ほとけおにいくさ」という訓読を並記するものもあり、一考を要する。

(二) 黒川眞一「佛鬼軍繪詞」(『國華』一一九、明治三十二年)、白畑よし「仏鬼軍絵巻について」(『大和文化研究』

九一四、昭和三十九年)、同「仏鬼軍」解説(奥平英雄編『御伽草子絵巻』、角川書店、昭和五十七年)、『室町時代物語大成』一一(横山重、松本隆信編、昭和五十八年)等。

なお、最近飯塚大展氏による訳注が刊行された(『一休和尚全集』四「一休仮名法語集」、春秋社、平成十二年)。

(三) 実際に調査することができたのは十念寺本(京都国立博物館寄託)、神宮文庫本、京大美学本である。片玉集本は国文学研究資料館蔵マイクロ資料によった。

(四) 元禄版は国会図書館蔵本の紙焼きによった。ちなみに『国書総目録』では元禄版として大谷大学蔵本を挙げているが、現物を見ると天保五年再刊の刊記が削られているもので、実際は天保版として採るべきものである。文政版は京都大学附属図書館谷村文庫蔵本、国文学研究資料館蔵本を閲覧、国文学研究資料館蔵マイクロ資料で上田市図書館花月文庫蔵本、東京芸術大学附属図書館臨本文庫蔵本、中京大学図書館蔵本を確認した。天保版は京都大学谷村文庫蔵本と前述の大谷大学蔵本を閲覧、国文学研究資料館蔵マイクロ資料で徳島県立図書館森文庫蔵本を確認した。刊年不明のものについては未見である。

(五) 白畑氏前掲論文他。

(六) 菱川清春は『大日本書畫名家大鑑』伝記下編(荒木矩、昭和五十年)によれば、「通称吉左衛門、別に雪艇また廣隆と号す。京都の人、よく絵草紙をえがく、天保頃」とあ

り、また『浮世絵事典』（吉田暎二、昭和四十六年）の「菱川派」の項では、菱川派とはいえないが菱川姓を名乗る人として清春を挙げている。

(七) 黒川氏前掲論文。

(八) 『新修京都叢書』一一二。

(九) 徳島県立図書館森文庫蔵本、大谷大学蔵本など。

(一〇) 『大和文華研究』四一「一休特輯」（大和文華館、昭和三十九年）。

(一一) 衛藤駿「一休宗純の画像」（『大和文華研究』四一）。

(一二) 『大日本史料』八一—三、文明十三年十一月二十一日条所載の『東海一休和尚年譜』（真珠庵蔵本）により、あわせて今泉淑夫『一休和尚年譜』（平凡社、平成十年）を参照した。

(一三) 衛藤氏前掲論文。

(一四) 真阿が足利義教の帰依を受けて十念寺を開いたという話は『誓願寺縁起』や『都名所図会拾遺』などにも記され、よく知られていたものである。

(一五) 飯塚氏は前掲書の解題で「元禄十年版を梓行した十念寺十八世沢了は、十念寺内にあった一休「自画自賛の仏鬼軍」が人に知られることもなく埋もれているのを残念に思い、一字一句の誤りもなく版行したという。私は、この時初めて『仏鬼軍』と一休が結びついたのではないかと推定する」と、この一休作説が沢了により唱えられ始めたこと

される。また片玉集本の讚についても、「『一休咄』刊行以後、より一層高まった一休の人氣に便乗したものといえる」と述べておられる。

(一六) 藤井隆氏による。

(一七) 『弘文荘敬愛書図録』（昭和五十七年）。

(一八) 京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会「お伽草子——物語の玉手箱——」（平成十一年十一月二十四日—十二月七日）の図録に、「京都大学所蔵お伽草子目録」を掲載することになり、そのための悉皆調査が行われた。

(一九) 『御伽草子の世界』（奈良絵本国際研究会編、昭和五十七年）所収。

(二〇) 飯塚氏は前掲書の解題の中で京大印哲本の奥書を引用しておられるが、内容等については触れておられない。

(二一) 前掲展示会の図録所載「京都大学所蔵お伽草子目録」（書誌調査は京都大学附属図書館古川千佳氏）による。

(二二) 『日本古典文学大辞典』「焰魔王物語」の項で、「宝生如来、大日心王等、『仏鬼軍』以来、密教色もみられる」と指摘される。

(二三) 胎藏界曼荼羅は『大日経』に基づいて描かれるが、この五仏の配置などは『仏鬼軍』本文にも引用される『大毘盧遮那成仏経疏』四などにも記される。

次於「四方八葉之上」。觀「四方佛」。東方觀「寶幢如来」。

……南方觀「娑羅樹王花開敷佛」。……次於北方觀「不動

佛」。……次於觀西方無量壽佛。此如來方便智。

（大正新修大藏經）

（二四）金剛界曼荼羅は『金剛頂經』に基づいて描かれるが、五仏や五智の配当などは『仏鬼軍』本文にも引用される『金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論』などにも記される。

五方佛位。各表一智。東方阿閼佛。因成三圓鏡智。

亦名三金剛智也。南方寶生佛。由成三平等性智。亦名三

灌頂智也。西方阿彌陀佛。由成三妙觀察智。亦名三蓮

華智。亦名三轉法輪智也。北方不空成就佛。由成三成

所作智。亦名三羯磨智也。中方佛。由成三法界智為本。

已上四佛智出生四波羅蜜菩薩焉。（大正新修大藏經）

（二五）平野宗淨『狂雲集全釈』（昭和五十一年）等。

〈付記〉

・本誌規定に従い、京大印哲本の翻刻紹介は割愛させていただきますました。影印・翻刻は『京都大学蔵 むろまちも

のがたり』第二卷（京都大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店刊）に収録を予定しております。あわせてご参照いただけましたら幸いに存じます。

・本稿は関西軍記物語研究会第三十八回例会（二〇〇〇年四月十六日 於神戸松蔭女子学院大学）での口頭発表に基づくものです。席上貴重なご指摘をいただきました諸先生方にお礼を申し上げます。

・京大印哲本発見は京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会のワーキンググループの方々の調査の結果であることを特記し、深謝いたします。

・資料の閲覧にあたり、味方健先生、十念寺君野諦賢氏、京都国立博物館若杉準治氏、神宮文庫にご高配を賜りました。記してお礼申しあげます。

（もとい まきこ・博士後期課程）